

10月第5週の礼拝説教

■日 時：2022年10月30日（日）10：30—11：30 降誕前第8主日

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「福音は神の力」

■聖 書：ローマの信徒への手紙1章16—17節（新約p273）

■讃美歌：83「聖なるかな、聖なるかな、」377「神はわが砦 わが強き盾、」

皆さんは、私たちの立川教会も属する広い意味でのプロテスタントのキリスト教がいつ頃日本に伝来してきたか、言い換えれば、私たちの教会のルーツはどこにあるのかをご存じでしょうか。それは、1859年の5月と6月にアメリカの[聖公会](#)の宣教師が来日したところから始まっていると言われています。また、この年は[10月](#)に米国長老教会の宣教師であり医師でもあった[ヘボン](#)が来日しました。彼は、私たちになじみのあるヘボン式ローマ字を考案して広め、明治学院を創設するなど大きな働きをしました。その後も、アメリカの[オランダ改革派教会](#)の宣教師フルベッキなども来日しました。そして、1861年にアメリカの改革派教会の宣教師であったバラが来日し、彼が開いた横浜のバラ塾から日本基督公会が創立され、今日の日本のプロテスタント教会の大きな流れを生み出しました。ですから、それを継承している日本基督教団が改革派と言われることがあるのもそこから来ています。その最初の日本基督公会の創立メンバー11人の一人であった押川方義が、仙台で1881年に創立した教会が私どもがかつて牧会しておりました仙台東一番丁教会です。また、仙台にあるキリスト教主義の学校である東北学院や宮城学院も1886年に彼の大きな働きによって創立されています。そして、本日お話ししようとしているのがマルティン・ルターです。彼が創立したルーテル教会は、1893年にアメリカの宣教師によって日本に伝えられました。そして、7年後の1900年にもフィンランドから宣教師が来日しています。そういう意味でも、橋本ライヤさんの母国フィンランドと日本のキリスト教は深く長いつながりを持っています。

さて、先ほどはローマの信徒への手紙1章16～17節を読んでもいただきました。ローマの信徒への手紙の第1章16、17節は、聖書全体の中でも大変重要な箇所です。ここに、キリスト教会の信仰の中心となる事柄が凝縮されて語られているからです。そしてこの箇所は、私たちの属するプロテスタント教会が誕生したとされるマルティン・ルターによる宗教改革に、大きな影響を与えたという歴史的事実があるのです。ルターは、17節の「福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しい者は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです」という御言葉か

ら、当時のカトリック教会が見失っていた真の福音、喜ばしい救いの知らせを聴き取ったのです。彼はその福音に忠実に生きようとして、1517年10月31日に、ドイツの東部にある小さな町**ヴィッテンベルク**の城教会の扉に『**95ヶ条の論題**』を張り出しました。そこから、宗教改革が始まったのです。そういうわけで、本日のこの箇所は、キリスト教会の歴史、さらに言うならば世界の歴史を変えた箇所だとも言えるのです。

ところで、私が最初にこのローマの信徒への手紙1章16～17節に出会ったのは、洗礼を受けて1年にも満たない1971年10月31日（日曜日）の宗教改革記念日の礼拝説教によってでした。日付まで鮮明に覚えているのは、御言葉にそれほどの強烈な印象を受けたという経験をしたからだと思います。幸いなことに、そのときの説教は活字になっているので、今でも読んで確認することができます。その時の牧師は、カール・バルトという神学者の記した『ロマ書』での聖書本文のドイツ語訳を取り上げながら、その独自性は旧約のハバクク書2章4節の引用文の訳し方であると説明されました。私たちの読んでいる新共同訳聖書では「**しかし、神に従う人は信仰によって生きる。**」と訳されています。バルトはそれを「義人は神の真実によって生きる」と訳しました。そしてこれに基づいて、今私たちが読んでいる新共同約聖書では、「**初めから終わりまで信仰を通して**」と訳されている御言葉を、「（神の）真実から（人間の）信仰へ」というように訳したのだと説明してくださいました。この先生もまた、ご自分の訳にこだわりがあり「真実」という言葉には、信仰の信という字を用いて「信実」と訳しています。私はその時、本当に強い衝撃を受けました。なぜなら、そのときの私は聖書の本文であるヘブライ語もギリシア語も、また、カール・バルトの用いているドイツ語も全く分かりませんでした。それまでの私が思い込んでいた、信仰とは私のほうから信じることという方向性が否定されてしまったからです。神様の「信実」、言い換えれば、神様のほうからのこの私に対する働きかけが先にあって、私の信仰が初めて成り立つ、ということに気づかされました。私にとっては、まさにこの時こそが神様に向かって心の向きを大きく回転させられた機会だったのかも知れません。

ここで聖書の元の言葉をよく読んでみますと、16節は「**わたしは福音を恥としない。**」の次に「**力 神の**」という順序で、神様の力が先立って記されているのです。「力」の元の言葉の「**デュナミス**」はダイナマイトの語源でもあります。それだけの巨大な力が、信じる者すべてに救いをもたらす神の力としての福音なのです。その力とは、言い換えれば私たちの救い主イエス・キリストの御言葉と十字架の御業です。そのような福音の力が私たちに先立って存在しているからこそ、私たちが全存在をかけて主に信頼して歩むという

道が開けているのです。それは繰り返しになりますが、神様のほうからの私たちに対する働きかけが先にあって、初めて私たちの信仰が成り立つということです。つまり、私たちの「信じる」という行為さえも、あるいは、「聖書を読む」という行為さえも、さらには、「伝道する」という行為さえも、主なる神様の一方的な働きかけがあり、主イエス・キリストの十字架の贖いの業によってそれが保障され、今この時、私たちとともに寄り添ってくださる聖霊の働きによって、現実のものとして成り立っているのです。使徒パウロも、宗教改革者たちも、あるいは、それに続く膨大な数の信仰者たちも、そのことを決定的に経験させられたからこそ、それを宣べ伝え、生涯をかけて証しし続けたのです。そして、今私たちの教会でも礼拝がなされているという事実が、主なる神様の力が今なお、私たちの上にも働いているという証明なのです。「神の真実が人間の信仰に出会うところに、かれの義が現れる。そこにおいて正しい者は生きるであろう。」（『ローマ書講解上』、小川圭治・岩波哲雄訳、2001年、平凡社ライブラリー）というカール・バルトの言葉は、まさに、私たちのささげているこの礼拝においてこそ、実現していることを共に確信いたしましょう。ここで働いている神の力こそが、私たちをこれからの一週間の歩みへと押し出してくださるのです。